

平成 22(2010)年度

大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書

白髭の美しさ

宮城大学事業構想学部事業計画学科 風見ゼミナール



目次

1. はじめに
 - 1-1 ゼミナール紹介
 - 1-2 白髭集落地域データ
2. 調査概要
 - 2-1 視察目的
 - 2-2 視察スケジュールと内容
3. 調査結果
 - 3-1 一回目結果
 - 3-2 二回目結果
 - 3-3 調査後の変化まとめ
4. 活性化案
 - 4-1 白髭集落の魅力（強み弱み）
 - 4-2 活性化のための提案内容
 - 4-3 住民と活性化案内容を踏まえて
5. 最後に
6. お礼

1. はじめに

1-1 ゼミナール紹介

宮城大学に所属する風見ゼミナールは、風見正三教授（※下図プロフィール参照）のご指導のもと3～4年生を中心とした「地域づくり」と「コミュニティ創造」について学んでいくゼミナールである。地域づくりには人と人とのつながりが欠かせないものであると考え、コミュニティという形でどのようにして人と関わっていくかをも突き詰めていく。また、自然環境とも共存していく姿が持続可能な社会を作るという理念からエコロジーもキーワードとしている。それらに基づき、仙台での Earhday 主催としての活動、宮城の名物づくりとしての焼きそばコンテスト開催、仙台放送との地域商品についての戦略コラボレーションなどを行ってきた。

今回風見ゼミナール（以下風見ゼミ）が福島県の集落活性化プロジェクトに参加したのも「人」「自然」「地域」がどのような形を迎えて行くのがよいか、実際に現地での声を聞いて少しでも役立てることがあるならば、と考えたからだ。

風見正三教授プロフィール

風見 正三 （Kazami Shozo）

宮城大学 事業構想学部 事業計画学科 教授
（都市計画、地域計画、コミュニティビジネス、
持続可能な地域創造学）



滋賀県立大学、東北学院大学、
芝浦工業大学、昭和女子大学等、非常勤講師

特定非営利活動法人 まちづくり政策フォーラム 理事
特定非営利活動法人 せんだいプチファーム 理事
特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター 理事

1-2. 白髭集落地域データ

白髭集落は二本松市に属し、二本松 IC から車で 20 分という比較的人の来やすい場所に位置している。東北新幹線福島駅からは車で 40 分であり、近くにみちのくの駅として地元で盛り上げている休憩場所が分かりやすい目印である。

また集落内は歴史のある建造物や自然の景色が残っていることは大きな魅力である。

過去集落では蚕を養殖して収入源としていたが、今は農業と外へ出での仕事が主な収入源となっている。専業農家も 6 名ほど存在しているが（2010 年時点）、将来的に若者が減って行くこと（図 3）に農業の不安を感じている様子。

あぶくまふるさとウォークという外部とのイベント企画を受け入れ、主催にまわるなど積極的に外と関わり活性化していこうという姿勢はあるが、集落の中までその流れが入ってこないことに焦りを感じていることがわかった。



図 2

白髭集落データ

- ◆世帯数…26世帯
- ◆人口……126人（高齢化率26.43%）
約30人前後が高齢者となる
- ◆農業品…なめこ栽培 等
- ◆歴史……相馬街道（別名奥州西海道の宿場）
歴史ある八つの巨石や、
神社など古くからの建造物が
残っている。物語ある集落である。

図 3

2. 調査概要

2-1. 視察目的

宮城から白髭集落内に実際に足を踏み入れることは、書面で向き合い電話や電子ツールを使っただけでは解らない実感を手に入れるためであった。現地の方々がどのような思いでこのプロジェクトを受け入れ、私たちを受け入れてくれるのかということを通じて多くの人々から聴ける機会を作る必要があった。

2-2. 視察スケジュールと内容

視察は年内に2回行う予定を組んだ。

1回目は2010.9.23(祝)～24(金)、

2回目はあぶくまふるさとウォークにあわせて2010.11.14(日)に行った。

詳しいスケジュールは下図に示した通りである。

一回目視察内容

• 一日目

(昼) ご挨拶→集落視察→集落入り

(夕方) ワークショップ→(夜) 交流会

• 二日目

(午前) 集落視察→(昼前) ご挨拶

(昼) 農家レストランで昼食

図 4

1 回目視察では一日目に自己紹介を済ませた後に集落内の公民館にて風見教授による地域づくりのための講義を行い、それを踏まえたうえでのワークショップを行った。ワークショップでは住民の方々を 2 グループに分け、それぞれが思う「集落の魅力と欠点について」を自由に挙げていきグルーピングするというもの。これにより、私たち外部が抱くイメージや印象とは違った面や、住んでいなければわからない点を掘り出すことに成功した。

二日目は行ったワークショップ結果に気をつけながら集落内を実際に歩いてみた。逆に何も知らずに集落内に入った時はどう感じるのかも考えた。その後は白髭集落内で作られた農作物を使っている農家レストランで食事をし、土地の味を教えてもらった。



2回目視察では、白髭集落の方々が主催で行っている「あぶくまふるさとウォーク」という白髭集落内がコースに含まれているウォークラリーイベントに手伝いとして参加した。内容は住民が用意した集落内の魅力あるポイントごとに農作物収穫体験や語り手による昔話、もちつきや昼食などをこなして集落の魅力を実感してもらうものだ。そこではいかに白髭集落が外部との交流を図ろうとしているか、また、その準備に対する手間ほどは集落内への外部からの成果がないのではないかという住民の苦悩を聴くことが出来た。



3. 調査結果

3-1. 一回目結果

一回目現地視察で得られた収穫は、

- ・ワークショップによる内部から見る集落の魅力と改善点
- ・ヒアリングや会話から得られる住民それぞれの考え
- ・風土体験
- ・住民との交流

と考えられる。特にワークショップで得たものは多くの住民からの声なので非常に大きな収穫になった。

3-2. 二回目結果

二回目現地視察で得られた収穫は、

- ・集落周辺の魅力的なスポット
- ・参加者としてイベント体験
- ・主催側イベントについてのヒアリング
- ・外部からの人々からの視点

特に印象に残っているのは参加していた人々の年齢層と主催側の「本当に集落の為になっているのか？」という焦りの声だ。参加していた年齢層は子どもも多く、ファミリーでの

参加者が多いように感じられた。また、参加者の会話からリピーターも多いようである。

3-3. 調査後の変化まとめ

二回の視察を終えて、考えていたことに変化がいくつかあった。

まず、住民がすでに立っている悩みの段階についてである。外部との交流に対し積極的と書面では知っていたものの、どのようにして外へ発信交流していいのかわからないといったところが悩みの大きな種になっているとゼミ内では考えていた。ところが実際に現地へ赴いてみると、そこではすでに外部との関わりを持つため集落がイベントを起こし集落がイベントを運営し集落が次への対策を練っていた。「何をすればいいのかわからない」というレベルではなく、すでに動いた後でどういう風にすれば魅力が発信出来て交流できるのかはわかっていたのである。これは集落住民のポテンシャルの高さを表しており、情熱を持ってもっともっと良くしていきたいといった段階にまで来ていた。このことは活性化案を作るにあたり“実行することへの躊躇い”が少なくかつ人の魅力を生かした提案が適しているという方向に進ませた。

また、白髭集落内に広がる風景の美しさはイギリスにも匹敵する自然の美しさを持っており、そのうえで日本ならではの歴史を感じさせた。それは何よりわかりやすい魅力である。細くカーブのある奥まった道を進んでいく集落の入口からは想像できないほど広々と広がっている田園風景は季節ごとに想像するだけでも胸が躍るような美しさだった。何かを作ったり手を加えたりする必要のある提案は要らないのだということも思わされた。



4. 活性化案

4-1 白髭集落の魅力（強み弱み）

集落活性化県民討論会において他大学の発表を聴いたうえでもやはり、白髭集落の魅力は風景と人の強さにあると感じられる。東京遠征をして物産展や、観光ツアーを提案しているところから福島ではどの集落も自然が美しく人があたたかいことは理解できた。白髭集落の魅力も分類するなら同じくくりになり、特別な魅力というのは目立ってはいないように思えるかもしれない。だが、やはり関わってみてこそわかることは人の強さだった。優しくあたたかいだけでなく、集落の未来をもっともっと良くしていつている姿は誰の力を借りたものでもなく、集落内で自然に生まれた活動で形を成していた。若い力の力をあくまで借りるだけであって、自分たちで変わっていかうとしていた白髭集落の姿は他にはない、必要な厳しさと情熱を兼ね備えている。

それを大きくとらえて、“人の魅力”として表記していくことをここに明記する。

下図はSWOT分析を使用して集落の強みと弱みを図示したものである。“ふるさとの本来の良さ”にはもちろん“人の魅力”も含んだものだ。

重要 成功 要因	外部からの機会	外部からの脅威
集落の強み	【“ふるさと”の本来の良さ】 × 【イベントでの注目】	【“ふるさと”の本来の良さ】 × 【交通の不便さ】
集落の弱み	【人の出入りの少なさ】 × 【イベントでの注目】	【人の出入りの少なさ】 × 【交通の不便さ】

**SWOT分析による
白髭集落の成功要因まとめ**

図 5

4-2 活性化のための提案内容

白髭集落の方々と交流を経て生まれた活性化案、

「しらひげDIVERS倶楽部～飛び込め！君は白髭民だ！～」

内容：白髭集落が参加するイベントに住民側として民泊をし、白髭住民とともにイベントの運営に携わる。また、それをきっかけに葉書のやりとりや、次に来る機会を作りやすくするために農業の一部手伝いや苗を一緒に植えて渡すことをオプションに付けることを勧める。

目的：集落の中に入り集落の美しさを知るとともに、住民と苦楽の感動を共にすることで思い出を作り白髭集落への思いを強めてもらうこと。思い出は人と人同士のつながりを一番深めるものであり、また人を動かすパワーの源になる。

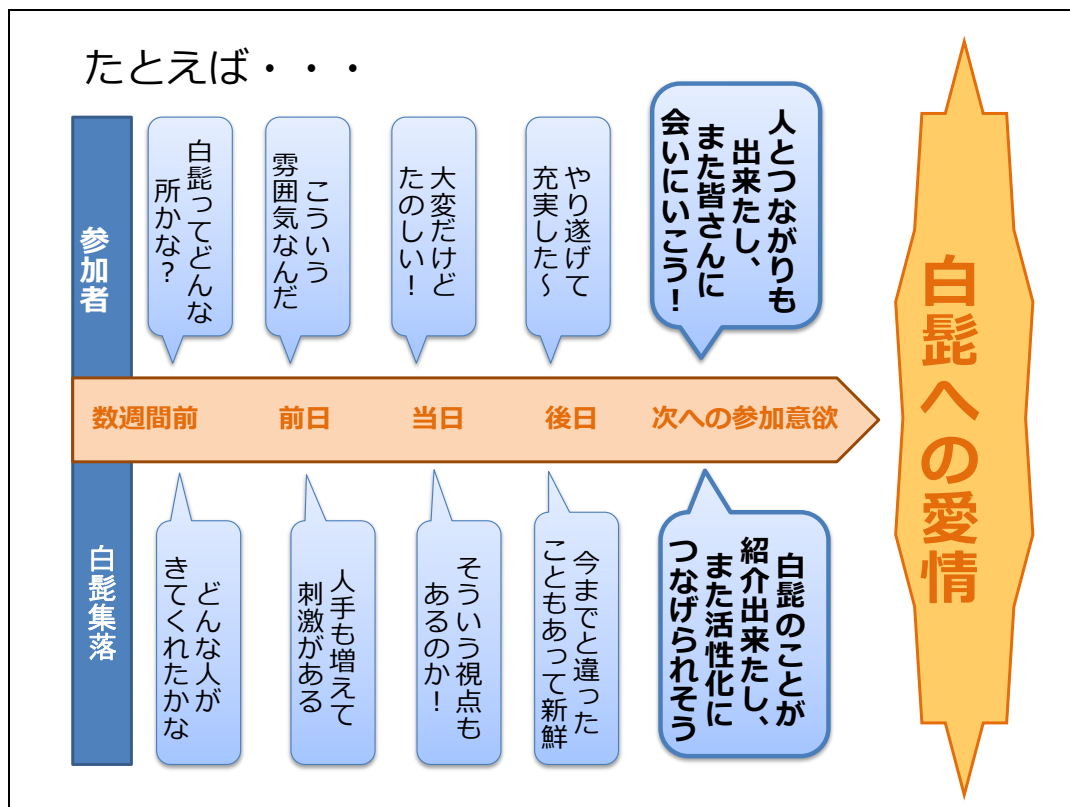


図 6

期待される効果：人の出入りによる集落への“刺激”、生まれる“責任感”、思い出という何にも代えがたい“充実感”が生まれ関わるすべての人の“活性化”につながる。討論会で他大学と意見を交わした際にさらに気付いたことは、リピーターを作れるかどうかは焦点になることだった。イベントに限ってしまうとやはりそれ以外のことでは連絡がとりづらくなってしまふところがあるので、白髭集落内に苗を一緒に植えることが成長経過の報告ついでに葉書を出して確認しに出入りするきっかけづくりになると考えられる。

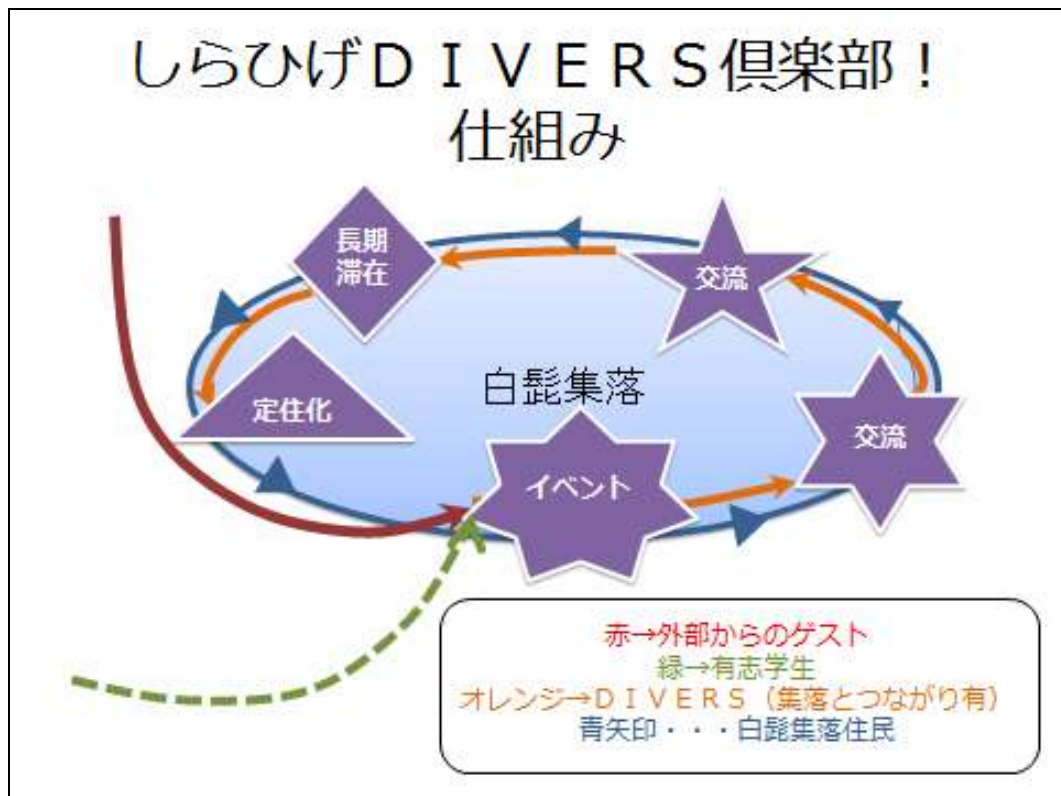


図 7

参加費用：参加者側からは基本的にとらない。NPOなどで活性化に対する支援金制度などがあるので、そういった制度を利用する。

宿泊先：民泊、同じ釜の飯を食うという言葉があるように、もてなされるだけでなく出来る限り協力しあうことがこの案において重要になってくる。

4-4 住民と活性化案内容を踏まえて

討論会の終盤、自由討論する場面で県民のコーナーから意見が出た。

「出してくれた案は本当にありがたい。ひとつ確認したいのは、本当にその案を実行する側に、集落側に最後まで付き合ってくれるのだろうか？ その覚悟が一番の課題であり、それは学生の方々に限った話ではない。若い人たちがこれから東京に出たいと思うのを蹴ってまで残ろうとする、または帰ってこようと思わせることがいかに難しいか。強制することでは解決しない。けれど、その覚悟に近い気持ちがあれば成立しないのではないだろうか？」

こう学生に問いかけたのは白髭集落の佐藤一夫さんだった。農家レストランを集落で営んでおり、視察の際も最も熱く活性化問題について語ってくれた方だ。

この言葉はとても重たく、簡単に答えの出るものではない。だがこれがやはり集落の方々

の本音に一番近いものなのだと考えられる。集落だけでも活動できる実行力を持った白髭集落でもこう考える方がいるのだから、どの集落でも思うことだろう。

知ってほしい、考えて欲しい、提案して欲しい、なにより他人事にしないでほしい。集落というのは仲間意識が強い。そのため、割り切った空気というものを敏感に察知するのかもしれない。yes, no だけでは出せず直ぐには答えられないとわかっている問いを投げかけたのは、その思いを忘れないで欲しいということだったのではないか。

5. 最後に

2011年3月11日、東日本大震災が起きた。東北の宮城、岩手、福島を中心に被害は広がり、揺れ以外にも津波や原発の破損による放射能被害が広がった。

このことは誰にも予想出来なかったことである。福島県で討論会をしている時や集落に訪れていた時、誰がこんな出来事を予測できただろうか。今現在(2011/05)時点で福島は原発の損壊に伴う被害を直撃している。計画的避難区域は広がり、この白髭集落も福島原発から半径約40kmに位置しているため、緊迫した状況であることは確かだ。私たちが訪れた美しい集落の風景はどうなってしまおうのだろうか？ なんとかして立て直さなければならぬ、けれどその道のりは一日にして成るものではなく、不安な色が隠せないニュースが日々飛び交っている。

震災後メールの返信が途絶えてしまった白髭集落に、先日思い切って電話をかけてみた。どんなふうになっているのだろうか、直接力になることもできないでいる私たちが電話して迷惑なのではないだろうか、そんな思いが数回の呼び出し音の最中頭の中を巡った。はい、もしもし、と集落代表との佐藤久さんの明るい声が聞こえた。矢継ぎ早に安否の確認、集落の状況、宮城の状況などを話した。佐藤さんはあっけらかんとした声で

「原発は大変だけど、集落はなんも壊れてないですよ。全部復帰しましたから。」
屋根の瓦は崩れたりしましたがけどねえ、と笑う。電話の後、やはり白髭は強いのだと感じた。必要なのは心配じゃなくてこれからの希望で、今出来ることを先も見ながらやるだけでいいのだと言われたような気持ちになった。

福島に人を呼ぶことが障害だらけになってしまったことは残念ながら事実である。だがその住民たちは福島を愛し、復活したいと願ってやまない。住民たちの郷土愛は今回の震災で強まり、日本にとどまらず世界規模での福島への注目がなくなることはこの先そうない。ここから持ち直した姿を見せたならば、最も美しいまち福島を全世界に見せつけることが出来るのではないだろうか。